

金屋子さんと鍛冶屋さん・邑智郡美郷町都賀本郷 令和2年12月22日

収録・解説・酒井 董美 ただよし イラスト・福本 隆男



https://kanbenosato.com/minwa/kancho_200712.html



語り手 高橋ハルヨさん(明治40年生まれ)
収録・昭和49年7月29日

あらすじ

昔、鍛冶屋かじやさんがあった。旅人がその鍛冶屋へ行って、「泊めちゃんさらんか」と頼んだけれども、「これには親父が死んで、まことに騒動しとるとこだけえ、泊めてあげたいが、それはできません」と言う。「そいじゃあ、も一軒先へ行ってみようかい」と旅人が一軒先へ行って宿を頼んだら、「これにや子が産まれたけえ、人を泊める場じゃあありませんけえ、よそへお願いします」。こう隣の家でも断わられた。「はあ、そうかな。そいじゃあしかたがないけえ、鍛冶屋にや親父が死んじやあおるが、泊めちゃろう言うてももうたけえ、そこで泊まらしてもらおう」と言って、旅人がそこへもどって泊めてもらったという。

実はその旅人は鉄の神さんである金屋子(かなや)こ

さんだった。そのようなわけで金屋子さんというものは、昔から産まれ日は嫌いだが、死に日が好きだというんだげな。

解説

語り手である高橋ハルヨさんのご自宅であつた。ところで「金屋子さん」であるがこれは「たたら」の神さんのこと。「たたら」といつても若い方にはお分かりいただけなと思うが、原料の砂鉄を窯に入れて木炭で熱して精錬するが、そのおり風を送るフイゴを称する。そしてこの精錬を司る神を「金屋子さん」というのである。ところで、なぜかこの神は死の忌みは嫌わないが、血の忌みは徹底的に嫌われるという言い伝えがある。手元にある島根県教育委員会発行の昭和42年度の民俗資料緊急調査報告書の『菅谷鑑』によれば「萬一家にいた時出産に遭つたら男子出生の場合三日間、女子の場合には七日間たたら場へ出る」とはできなかつた。だから出産が近づいたとみると、たたら職人

はたたら場に寝泊まりした。家人もまた産後男子は三十日の初参りがすむまでは、たたら場へ近づくと禁ぜられた。「六十五一六十六ページ・牛尾三千夫氏執筆部分」とある。この話はこのような信仰が基盤となつて成立しているのである。

なお、録音状態がやや悪く、また最後のところが切れているが、貴重な内容なのであえて紹介することにしたものである。

調べてみると高橋さん宅へは昭和48年と49年の夏に3回うかがつている。いずれも山陰本線の列車で三江線に乗り換えてうかがつた。そして昔話31話はじめわらべ歌や田植え歌もうかがつている。また昔話は正月によく聞いたものだと、仲間内で語る際は「ヨリ」に火をつけて回し、たまたま火が消えた「ヨリ」を握っている者から語るといふ、まるで古代信仰をうかがわせるような話も教えていただいたことが懐かしく思い脱されるのである。

(元島根大学法文学部教授)

